

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2019

課題番号：18K18477

研究課題名(和文)造形作品の記述についての文化史的観点からの萌芽的研究

研究課題名(英文) Exploratory studies on the description of the art works from comparative perspectives

研究代表者

秋山 聡 (Akiyama, Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：50293113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：造形物についての即物的な記述は、近代的美術史学における基本的方法論だが、歴史的にみると決して普遍的なものではなく、むしろ一般的には主観的印象や文学的修辞とは不可分なものであることが多い。また、文化や時代等によって、記述概念にはかなりの相異が認められる。記述を、言語によるものに留まらず、数や寸法、距離、あるいは図等にまで拡大して理解することにより、記述についての広い視野からの学際的文化的研究が可能となる。また、社会教育における記述の実践的活用が、グローバル化する世界において、客観的な相互理解を促進せしめうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

造形物の記述についての研究は、美術史学や文学研究においては、これまでも行なわれ、一定の成果が挙げられてきた。本研究は、造形物の記述の範囲を、文化全般に押し広げることと、造形物以外についての記述の諸相の探求により、これまで専門領域の枠組みの中で探求されてきた造形物の記述を相対化する。それとともに、国際的比較を行ないつつ、記述という行為の普遍的な性格と地域や時代により変化しうる要素を弁別することにより、今後の国際比較研究の基盤整備を促進せしめうる。また、社会教育への活用の可能性もうかがわれ、広く社会一般における自他の文化理解に寄与しうる。

研究成果の概要(英文)：An objective description of a figurative item is a fundamental method in modern art history, but historically it is by no means universal, and is generally inseparable from subjective impressions and literary rhetoric. In addition, there are considerable differences in a concept "description" depending on cultures and times. By understanding the concept "description" not only in terms of language but also, for example, in number, size and distance, or images, it will become possible to carry out interdisciplinary cultural studies on description from a broader perspective. The practical use of descriptions of images or a landscape in social education can promote objective mutual understanding in the age of globalization.

研究分野：美術史学

キーワード：美術史 比較美術史 記述 造形 聖地風景 建築史 文化史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、かつてエクフラシスに関わる解説文献目録を美術史学の立場からまとめたことがあり(『西洋美術史研究』Vol.1(1999))、その過程で前近代における主要な作品記述が、実際の作品に即した記述と文学的創作とのアマルガムのようなものであることが多い点に興味を抱いた。また、ドイツ留学中の実体験を通じて、一般のドイツ人がまず目に見えたものを言葉に置き換える性向があり、その交換がコミュニケーションを形成することを知り、その背景に自国語教育における記述の重視があることを知った。帰国後、教育学部に在職した折、鑑賞教育の枠組みの中で、作品記述の実践を学生に行わせたところ、ほとんどが初めての経験であり、苦労することを知り、文化間格差を感じるに至った。こうした経験から、造形物の記述を考察する上で、時代や文化、地域による相違に顧慮することの必要性を痛感するとともに、こうした研究は、研究のみならず教育にも資するのではないかと考えた。

2. 研究の目的

造形物の記述は、近代的な学問としての美術史学にとって、基本的な営為であるとともに、自己言及的な研究対象でもありつづけてきた。しかし、パノフスキーも指摘したように、実のところ記述は真に客観的ではありえず、それが為された環境の文化的背景が必然的に反映せざるをえない。本研究においては、前近代の西欧における造形物の記述の歴史的展開を古代のエクフラシスにまで遡った上で、様々な媒体における記述を非西洋圏の事例と比較することにより、造形物についての記述の特殊性を浮かび上がらせたい。造形物の記述について、国際的に比較した包括的研究は未だなく、様々な事例を広い地域に亘って博捜し、地域的特性と普遍的要素の抽出に努めることにより、造形物の記述の多様性を包括的に浮かび上がらせることが期待される。また、造形物の記述が、その他についての記述とどのように異なるのか、相互比較および記述概念の再検討等を通じて、その相対化を図ることも目指す。加えて、造形の記述を軸とした人文学的・社会教育活動による地域・社会連携の端緒を見いだせればと考えている。

3. 研究の方法

広く記述に関わる研究文献を視野に入れつつ、具体的な一文献史料を精読するとともに、適宜記述の実践を通じて、造形物の記述についての諸相を浮かび上がらせようとした。西洋の事例に関しては、主として研究代表者の秋山が担当し、古代・中世から初期近代に至るまでの造形物の記述の事例をエクフラシスから旅行記や所蔵目録までの幅広い文献ジャンルに亘り渉猟し、分析を行ない、その過程で適宜ダリオ・ガンボニー、ゲアハルト・ヴォルフ、ミケーレ・バッチといった海外研究者に国際研究集会等の折にそれまでの成果を披露すると共に助言を請うた。とりわけ2019年度研究協力者のガンボニー教授とは、熊野行を共にし、造形物や聖地風景の記述について親しく議論をすることによって、種々新たな知見を得ることができた。また、教会や宮廷の財産目録等における記載の歴史的展開を跡付けることにより、非文学的史料における記述の特性を浮かび上がらせようとした。非西洋圏については、佐藤康宏と松崎照明、山本殖生を研究協力者に得て、平安期の山水画を主題とした漢詩や五山文学以降の題画詩や題画記、屏風歌、貴族の日誌等から比較対象事例の抽出を試み、日本特有の記述のあり方を探求しようとする。とともに、建築物(主として山岳宗教建築)についての記述や非造形物の一例として聖地風景についての巡礼記・旅行記における記述、さらには行為についての記述ということで、山岳修行や儀礼についての記述等の研究を展開した。造形物からさらに聖地風景や宗教的幻視等の記述にまで研究領域を広げ、比較文化的研究も行なうことにより、研究の視野を拡大し、その成果の一部は、国際美術史学会第35回世界大会において口頭発表を行なった。なお比較研究においては適宜、中国美術に関しては塚本麿充、イスラム美術については榎屋友子からも適宜助言を得た。

4. 研究成果

研究代表者の秋山聰は、まず造形物の記述についての美術史学におけるこれまでの研究を把握することに努め、近年美術史学や古典学、芸術学等の領域において、とりわけエクフラシスを中心に研究が発展してきていることを確認した。但し、エクフラシスが文学や修辞学において発展してきたために、不可避的に文芸学・文学的要素に重点を置いたものが多い傾向があることが看取されたため、当初の計画を拡大し「記述」概念をもう少し広く捉え、エクフラシスや近代美術史学における記述を相対化するための比較対象例として、建築物や聖地風景、儀礼等の記述や造形による実際的な記述としての模写・複製等も視野に納めつつ考察を進めるとともに、大学教育・社会教育での鑑賞行為における記述の実践的活用をも学生・市民を対象として試みるに至った。また、ユダヤ教を始めとする偶像崇拜を禁忌とする宗教文化においては、造形物の具象的な記述

は少なくなるものの、例えば旧約聖書には造形物の数値や寸法等についての言及が散見される。これらはキリスト教中世にも聖地や聖遺物等の記述中に認められ、言語に代わる数値・寸法による記述と見なすことができる。こうした観点から、巡礼記・旅行記における数的記述を渉猟した結果、西洋中近世においては聖地において測定された数値が真正かつ正確な記述として認識されるとともに、そうした測定という行為自体が重要な信心行為とみなされていたことが明らかとなったが、これはクラウトハイマーにより指摘された中世における建造物のコピーにおける特徴とも合致するものである。さらに、測定および寸法の重視が顕著であるデューラーの美術理論の背景にも、聖なるものの測定という宗教的背景が存在したことが浮かび上がり、2019年度末に論文発表された。さらに、宗教的幻視(visio)の記述と造形物の記述との間に一定の相関性があることが、比較美術史的研究によって明らかとなり、その成果の一部は第35回国際美術史学会において秋山が共同座長を務めた宗教的幻視をテーマとするセクションにおいて口頭発表された。また、新宮市教育委員会後援による環境問題研究会(新宮市)におけるガンボーニ教授の発表(今年度末刊行済、地元誌で報道(註1))でも、神跡ないし奇跡とみなされた巨岩や名勝等の呼称も、洋の東西を問わず、記述という枠組みで考察しうるということが確認された。

研究協力者松崎照明は、建築物および聖地風景ならびに儀礼についての記述を対象として2年度に亘り研究を展開し、記述概念を拡大的に捉えつつ、日本建築の歴史的展開の中で建築物の記述の様相が、文字表記においては間面記法から室町期以降、正面と側面の間数による表記へと変遷、図面表記では指図が主流であったところから、次第に雛形・雛形本や起し絵図等の利用へと江戸時代以降変化したことを明らかにした。また、絵画史料を含めた諸記述を活用しての新宮市の神倉権現社拝殿の復元を、2019年度の研究協力者山本殖生の協力により諸史料調査に加えて『神倉日記』中の内部見取り図や現地礎石の調査により試みた結果、同拝殿は建長六年(1254)には建立されていたが、その後数度に亘り桁行と梁間の間数が変化したこと、本来の形式は平入で後部に本殿、並宮が突出する平面を有し、床下は柱を長く伸ばした懸造であったことが判明した。こうした研究の成果の一部は、上述の国際美術史学会世界大会において口頭発表され、現地メディアに取り上げられ(註2) また単著『山に立つ神と仏』(2020)においても論じられているが、さらに2020年度中に論文発表される予定である。

加えて、松崎は口伝で伝えられるために文字資料が僅少だと言われてきた山岳信仰における修行や儀礼の記述についての調査を山本の協力の下に行った。千日回峰行者の手文や行場を繋げて記す巡礼記、参詣曼荼羅や名所図会等を記述という観点から見直し、既述と現地風景との差異、記述の真正性や修辭的誇張などを検討、造形物の記述を相対化するための作業を行った。その成果の一部は、松崎ならびに山本により1月に口頭発表された。なお、これらの成果を秋山がさらに西洋の巡礼記と比較した上で2020年度にさらに発表を予定している。

また、2018年度の研究協力者佐藤康宏は、欧州において作品記述についての実践的な調査研究を展開したが、アムステルダムでは伊藤若冲の『乗興舟』の調査を行い、国内外のコレクションに所蔵される異版との異同についての精細な記述をし、パリでは展示された『釈迦三尊像』及び『動植綵絵』を精査し、33幅の記述に従来不足の箇所を補い得た。なお、これらの成果の一部が含まれた単著『若冲伝』(2019)は、2019年度の芸術選奨文部科学大臣賞を受賞している。

なお、『熊野歓心十界図』等において行われていたことが知られる「絵解き」も、作品記述という枠組みの中で捉えなおすことが出来ると思われ、西洋中近世の聖遺物公開行事における台本(Schreizettel)による説明等との比較研究により彼我の共通点・相違点が浮かび上がりつつあるが、2020年3月にジュネーブ大学および国際熊野学会の協力を得て、ジュネーブで予定されていた国内外の研究者・実践者による国際ワークショップ(The Japanese Sacred Site of Kumano and beyond: A Comparative Perspective on Religious Practices, Architecture and Painting)が、covid-19蔓延により延期の止む無きに至ったことは残念であった。

本研究において、当初の予想を越えて進展したのが、地方の地元研究者・実践者(修験、絵解き等)との共同研究体制の構築であった。新宮市は知的好奇心の強い市民が多いことで知られるが、国際熊野学会、環境問題研究会、熊野学研究委員会等の方々との研究交流が予想以上に進展し、海外研究者を交えての研究集会の開催や地元研究者・実践者との国内外でのワークショップ・フォーラム等の開催が、本研究の研究期間内はもとより、今後も継続的に展開しうることとなったのは望外の結果であり、今後さらに熊野地方と連携して、聖地やその記述をテーマとしての国際的学際的研究を国内外の研究者と展開する基盤が形成されつつある。加えて、記述という行為が、研究者の研究対象および研究活動に限られるのではなく、社会教育にも汎用しうる一般性を本来備えていることが、地元研究者・実践者ならびに市民の方々との交流を通じて明らかとなり、今後、本務校において地域・社会連携の一環としての記述の活用を検討することとなったのは、本研究による思わぬ成果の一つと言えよう。

註1 <https://kumanoshimbun.com/press/cgi-bin/userinterface/searchpage.cgi?target=201906300101>

註2 https://www.european-news-agency.de/kunst_kultur_und_musik/interview_with_professor_teruaki_matsuzaki_-75711/

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 秋山聡	4. 巻 36
2. 論文標題 デューラーにおける「測定」重視の背景について：「聖なる測定」に関するノート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術史論叢	6. 最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ダリオ・ガンボニー（訳と解題：太田泉フロランス）	4. 巻 36
2. 論文標題 石と木、イメージと実在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術史論叢	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 5件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 秋山聡
2. 発表標題 アルプス以北における「古代」の再生と「古典」
3. 学会等名 シンポジウム：西洋美術史における 古典 と 古典主義 、名古屋大学（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Dario Gamboni
2. 発表標題 Stone and Wood, Image and Presence
3. 学会等名 環境問題研究会6月特別例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山聡
2. 発表標題 アイコンズムとアニコニズム：ガンポーニ教授の講演にあたって
3. 学会等名 環境問題研究会6月特別例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松崎照明
2. 発表標題 ガンポーニ教授へのコメント：熊野と出羽の事例から
3. 学会等名 環境問題研究会6月特別例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Akiyama/Giuseppe Capriotti/Valentina Zikovic
2. 発表標題 The Mystical Mind as a Divine Artist: Visions, Artistic Production, Creation of Images through Empathy: An Introduction
3. 学会等名 35th CIHA World Congress(国際美術史学会第35回世界大会) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Teruaki Matsuzaki
2. 発表標題 Kake-zukuri: A Japanese Building Type of Mountain Religion for the Mystical Experience
3. 学会等名 35th CIHA World Congress(国際美術史学会第35回世界大会) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Akiyama
2. 発表標題 On Vestments for Statues, from Comparative Perspectives
3. 学会等名 International Workshop: Modern Sacred Images in Europe and Japan: Contact, Comparison, Conflict (Waseda University) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山聰
2. 発表標題 聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み
3. 学会等名 シンポジウム：東西の聖なるもの：比較文化論を拓く（青山学院大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山聰
2. 発表標題 聖地の記述/記録
3. 学会等名 東大人文・熊野フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松崎照明
2. 発表標題 聖なる空間の記述・記録：文字、絵図、立体-熊野神倉権現社の記録を中心に
3. 学会等名 東大人文・熊野フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本殖生
2. 発表標題 聖地熊野の捨身行：古記録から秘伝へのアプローチ
3. 学会等名 東大人文・熊野フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 秋山聰
2. 発表標題 人文(学)と熊野
3. 学会等名 東大人文・若手フォーラム in熊野
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐藤康宏	4. 発行年 2019年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 298
3. 書名 若冲伝	

1. 著者名 松崎 照明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 288
3. 書名 山に立つ神と仏 柱立てと懸造の心性史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松崎 照明 (Matsuzaki Teruaki)	東京家政学院大学・客員教授	2018-19年度
研究協力者	佐藤 康宏 (Sato Yasuhiro) (50141990)	東京大学・大学院人文社会系研究科・教授 (12601)	2018年度
研究協力者	ガンボニー ダリオ (Gamboni Dario)	ジュネーブ大学・教授	2019年度
研究協力者	山本 殖生 (Yamamoto Shigeo)	国際熊野学会・代表委員	2019年度